The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国語と日本語における聞き手敬語用法の30 年間の変化 ： 韓国語の言いさしスタイルの使用拡大に焦点を当てて
Author(s)	李, 吉鎔
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2019, 16, p. 112-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73643
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 16 号（2019 年 7 月）112-127

韓国語と日本語における聞き手敬語用法の 30 年間の変化

－韓国語の言いさしスタイルの使用拡大に焦点を当てて－

李　吉鎔

【キーワード】聞き手敬語、30 年間の変化、格式体、言いさしスタイル、社会的尊重意識

【要旨】

今からおよそ 30 年前の、1987 年当時の韓国は元軍人が統治する国であった。権威的な上下関係が重視され、伝統的な儒教の価値観が社会を支配していた。その後、1992 年の軍事独裁政権の終焉と民主化の進行とともに、権威主義的な考え方は次第に薄れ、個人の人権が尊重される社会へと発展してきた。本研究ではこうした社会の変化が、ことばづかいにどのように反映されているか確認することを目的に、1987 年の「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」（荻野他 1990）の調査と同じものを 2017 年に実施した。分析の結果、(1) 韓国社会では依然として年齢差を重視し、年齢差で丁寧度が決まる度合いが高い、(2) しかし、家父長制の家族構造は崩れつつあり、また、たとえ相手が目下の人でも丁寧に待遇すべきである、といった「社会的尊重意識」が見られる、ということがわかった。韓国における聞き手敬語は、格式ばったスタイル（上称・下称）の使用減少および言いさしスタイル（略待丁寧形・略待普通形）の使用拡大という変化の中にあり、その変化は家族内から始まっていることが明らかになった。

1.　はじめに

今からおよそ 30 年前の、1987 年当時の韓国は元軍人が統治する国であった。政治的な閉塞感から民主化を求める学生運動が活発に行われた時期でもあり、また 1988 年にはオリンピックも開催されるなど、経済的には発展期に入っていた。しかし当時は、権威的な上下関係が重視され、伝統的な儒教の価値観が社会を支配していた。目上には敬語の使用が厳しく要求される反面、目下には格式ばった下称で待遇しなければならなかった。

1987 年当時の家庭は、産業化・都市化による核家族が増える中、依然として家父長制的家族構造の意識が色濃く残っており、特に父親の権威は高いものであった。また当時の大学は学科単位に組織され、そこでの生活は先輩と後輩との連帯が強く、内部の人間関係の中で何よりも上下関係が重要視されていた。まるで軍隊のような社会であった。

一方、2017 年現在は、大都市やその周辺に計画的につくられたニュータウンの核家族で育った学生が多くなり、家族内だけで生活をし、一家眷族との関係は薄れつつある。また大学では、融合的な学問単位が歓迎され、学生には主専攻以外に複数専攻や副専攻の履修が義務付けられている。その結果、大学内での移動が激しくなり、大学の中での人間関係も流動的なものとなっている。

このように社会が変化する中、最近大学では同じ学科の先輩と後輩がともに敬語を使うことで互いに尊重し合う場面や、テレビのリポーターが敬語を使って小学生にインタビュ

ーする場面を、しばしば目にする。30 年前の韓国では考えられないことである。社会の変化に伴い、ことばづかいも変わってきていると思われるが、本研究でその検証を試みる。なお、本研究の目的は韓国におけることばづかいの変化を捉えることであるが、日本の場合との対比によってより鮮明に描き出したいと思う。以下では、まず日本の結果を簡略にまとめ、その後韓国の結果について詳しく検討する。

2.　研究の方法

1987 年当時の日本と韓国における聞き手敬語の様相は、荻野他（1990）「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」に詳しくまとめられている。荻野他（1990）は、それまで日本と韓国の敬語用法の異同がはっきりしなかったことを踏まえ、日本と韓国で共通の枠組による敬語の対照社会言語学的な研究を行ったものである。

荻野他（1990）では、聞き手敬語の使い分けを抽出することを目的に、日本と韓国の大学生に対してアンケート調査を行った。アンケート調査では、日本側は東京近辺の男子 72 人（37.7%）、女子 119 人（62.3%）の合計 191 人、韓国側はソウル近辺の男子 118 人（41.0%）、女子 170 人（59.0%）の合計 291 人（性別未回答者 3 人を含む）を対象とした。大学生が日常接する人物をリストアップし、それぞれの人に対し、**これからあなたはどこへ行くか**とたずねるときの「行くか」を調べたもので、空欄に自由に表現を記入してもらう自由記入式の調査である[1)]。分析に際しては、まずアンケート結果を直接反映したグラフによる分析を採用し、日本語と韓国語の敬語用法の差を直接対照して明らかにした。次に、敬語表現の使い分けについて、「丁寧度」による分析を行った。

本研究では、第 1 節で述べたような社会の変化が、ことばづかいにどのように反映されているかを確認するため、荻野他（1990）の 1987 年の調査と同じものを 2017 年に実施した。日本では東京と千葉の大学生 156 人（男性 24 人、女性 132 人）、韓国ではソウルの大学生 181 人（男性 64 人、女性 117 人）にアンケート調査を行った（日本では 2018 年に回収）。日本・韓国とも女性の割合が多く（それぞれ日本では 84.6%、韓国では 64.6%）、特に日本の場合は 1987 年調査と比べて女性の割合が 20%以上も多くなっているため、男女差を考慮に入れての分析が要求される。

3.　日本語と韓国語の敬語の体系について

ここでは、日本語と韓国語の聞き手に対する敬語の体系を簡略にまとめる。特に日本の読者の理解を考慮に入れ、韓国語に焦点を当てる[2)]。

---

1)　荻野他（1990）では「道を教えてくれ」というときの「教えてくれ」をどのようにいうかもたずねている。こちらは、あらかじめ予備調査で得た語形を列挙しておき、その中から選んでもらう選択式である。本稿ではさしあたり「これからあなたはどこへ行くか」のみを対象とする。

2)　韓国語の敬語に関する研究はその数も多く、蓄積された成果には膨大なものがある。敬語の語彙的・形態論的研究、つまり敬語の構造や体系といった内的側面に注目した研究のほか、敬語の外的側面に力点を置いた社会言語学的な研究も 1970 年代から活発に展開されてきた。聞き手敬語の体系についての論議は왕한석【Wang, Hahn-sok】（1986）の第 2 章およ

まず、日本語の聞き手敬語は、丁寧体と常体（または普通体）に分けられ、丁寧体は「でございます体」、「であります体」、「です・ます体」の 3 つに区分される。そして、敬語形式の付かない常体として「だ・である体」がある。この 4 つの待遇レベルに「いらっしゃる」などの独立した尊敬動詞が組み合わされたり、あるいは尊敬を表す「（ら）れる」や「お／ご～になる」が付属することで聞き手待遇を示すことになる。

韓国語の聞き手敬語は、人称代名詞や助詞、そして用言の終結語尾などで表す待遇表現であるが、その中でも特に終結語尾が複雑に発達している。この終結語尾の待遇レベルは、格式体と非格式体を混ぜ合わせてレベル分けされており、研究者によって 4 段階から 6 段階まで区分されている。最も一般的な区分方法とされる、6 段階の待遇レベルを示せば、次の表 1 のようになる。

表 1　現代韓国語の聞き手敬語のレベル

	格式体	非格式体
尊称	①上称（hapsyo体） ③中称（hao体）	②略待丁寧形（hayyo体）
非尊称	④等称（hakey体） ⑥下称（hayla体）	⑤略待普通形（hay体）

以下、表 1 について説明を加える。まず、「尊称・非尊称」の区別は、研究者によって「尊称・卑称」、または「高める・高めない」など、必ずしも統一のとれたものではない（成耆徹 1970、徐正洙 1978、한길【韓桔】1991 など）。次に、①～⑥の番号は、一応の語形の丁寧度の順番を表す。しかし、研究者によって②と③、または④と⑤が入れ替わることもある[3)]。

そして「上称・略待丁寧形・中称・等称・略待普通形・下称」の用語は、荻野他（1990）のものを受け継ぐことにする。括弧の中の「hapsyo 体」などは、韓国語学での伝統的な用語を Yale 方式のローマ字表記法に従って示したものである。カタカナ表記にすると、それぞれ①ハプショ体、②ヘヨ体、③ハオ体、④ハゲ体、⑤ヘ体、⑥ヘラ体となる。なお、③中称（hao 体）と④等称（hakey 体）は、話し手が成人の男性であるか（③中称）、または聞き手が子供扱いできない場合（④等称）などといった使用上の制約がある。これらは使われる場面が今日ではかなり限定されており（梅田 1974）、特殊な場合に極まれに使われるものである（徐正洙 1978）。そのため、現代韓国語の聞き手敬語のレベルを、①・②と⑤・⑥の 4 段階で十分であるという主張もある[4)]（이은희【Lee, Eun-hee】2010:286-287 の議論を参照）。

び한길【韓桔】（1991:27-43）に詳しい。また社会言語学的な研究の概要は徐正洙（1978）に詳しいので参照されたい。

3）荻野他（1990:25-26）でも、1987 年の調査における丁寧度は、「①－②－⑤－④－⑥」の順であるとしている。ただし、④と判断した語形については、④等称を転用した迂言的疑問用法であり、やや特殊なものであるという。この点については脚注 8）を参照されたい。なお、③中称の非出現については脚注 5）を参照されたい。

4）韓国人の日常生活や、韓国語を学ぶ外国人の敬語習得のことを考えると、4 段階説は現実的であり、また合理的であると思われる。ただし、韓国語母語話者であれば、子供のときから童話や教科書などを通して、③中称（hao 体）や④等称（hakey 体）についての知識を習得しており、リテラシーを持っているという（나동숙【Na, Dong-sook】2016）。これら

梅田（1974）や徐正洙（1978）のいうように、現代韓国語の聞き手敬語は、②略待丁寧形（hayyo 体）および⑤略待普通形（hay 体）という新しい形式の出現で、従来の形式からなっていた体系が変化を来し（すなわち③中称および④等称の衰退）、次第に細かいレベルの区分を失っていく、いわば進行中の変化の中にある[5)]。

なお、日本語の尊敬を表す「（ら）れる」などのように、韓国語の述語に尊敬を表す尊敬接辞「시(si)」（韓国語学では「先語末語尾」という）が、語幹と終結語尾の間に入り、尊敬語を作る。元々主体を上げる働きをするものであるが、聞き手待遇の場合にも大きな役割を果たす。

4.　1987 年当時の日本と韓国の大学生における聞き手敬語用法

これより本題に入る。まず本節で、1987 年当時の日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の調査結果を、荻野（1989）や荻野他（1990）に従って簡略にまとめることにする。

4.1.　聞き手と敬語表現の関係

まず、聞き手と敬語表現の関係について、日本の「行くか」では、丁寧にいうべき相手とそうでない相手がきれいに区分された（§5.1.左側図 1 を参照）。前者はイラッシャル系とデスマス系が主であり、後者に対しては尊敬語も丁寧語も含まない「行くの？」が最もよく使われている。

一方、韓国の場合は、聞き手と表現の関係が複雑である（§5.2.左側図 3）。大学生における韓国語の聞き手敬語の特徴は以下のようにまとめられる。

（1）全体として丁寧度を最も左右するのは、尊敬接辞「시(si)」である。

（2）待遇レベルは上称・略待丁寧形・略待普通形・等称・下称の順である。

（3）その他、特異なふるまいを見せている K「가(ka)？」は注目に値する。略待普通形の K「가(ka)？」は、「兄姉」に最も多く使われるが、「母親」や「年上の同級生」のような比較的丁寧に接する人に対しても使われ、また「親しい友人」から「4-5 歳の子供」まで幅広い年齢の人に使われるなど、パターンが複雑である。

4.2.　聞き手に対する待遇構造の違い

次に、日本と韓国のそれぞれで、どのような聞き手に対して丁寧な待遇をするか、丁寧度による分析を行い、聞き手の段階付けを行った結果をまとめる（§5.3.図 5 の日本（1987 年）と韓国（1987 年）も参照）。日本と韓国の丁寧度の主な違いは、次のようなものである。

（1）韓国は親（特に父親）に丁寧に接するが、日本は親友などと同じような低い丁寧度で接する。兄弟姉妹を比較すると、日本は誰に対しても同じように接するが、韓国は、兄・姉に対しては弟・妹よりも丁寧に接する。

の文体は、韓国語において「社会方言」または「役割語」として機能することになる。

5）本研究では日韓ともに 20 代初めの大学生を対象にしている。したがって、③中称（hao 体）および④等称（hakey 体）の使用はそもそも不自然であり、本研究の資料を以て韓国語の敬語法体系を論じることはできない。

(2)「大学の上級生」と「大学の年上の同級生」に対する丁寧度の差をみると、日本では両者がまったく違っていて、上級生にはきわめて丁寧に接し、年上の同級生には丁寧でない接し方をするが、韓国では日本ほど大きな差はなく、上級生のほうが年上の同級生よりもやや丁寧なだけである。

(3) 50 歳くらいの人に対して、日本では初めて会った場合とよく知っている場合とである程度差を付けた待遇をするが、韓国ではそれほどの差はなく、いずれの場合も高い丁寧度で接する。

これらの結果から次のことがわかる。すなわち、日本では敬語の使い分けの基準として家族に対してウチと見なす第一のルールが働き（ウチ・ソト関係）、家族以外では「聞き手との社会的役割」が大きく働く。韓国では、親族に対して親族間の世代関係のようなものが働き、親族以外では「聞き手との年齢差」が大きく働く。日本も韓国も、聞き手に対する待遇構造は二重になっている。

以上で、1987 年当時の日本語と韓国語の聞き手敬語の様相を確認した。荻野他（1990）には、以上の 2 点以外にも、「敬語表現の丁寧度」や「話し手や聞き手の男女差」についても興味深い分析が行われているが、本稿では詳細な結果を提示するだけの紙幅を持たないため割愛する。

いよいよ次節では、日本語と韓国語の順に聞き手と敬語表現の関係についての 30 年間の比較を行う。その後、聞き手に対する待遇構造の違いについてまとめる。

5. 日韓両言語における聞き手敬語用法の 30 年間の比較

5.1. 日本語における 30 年間の比較

それでは、まず日本語における聞き手と敬語表現の関係から見ていくことにする。左側の図 1 は 1987 年調査の結果を荻野他（1990:11）より引用したものであり、右側の図 2 は 2018 年調査の結果をまとめたものである。図の中の表現の順序および聞き手の順序は「丁寧度」の順にしてある。

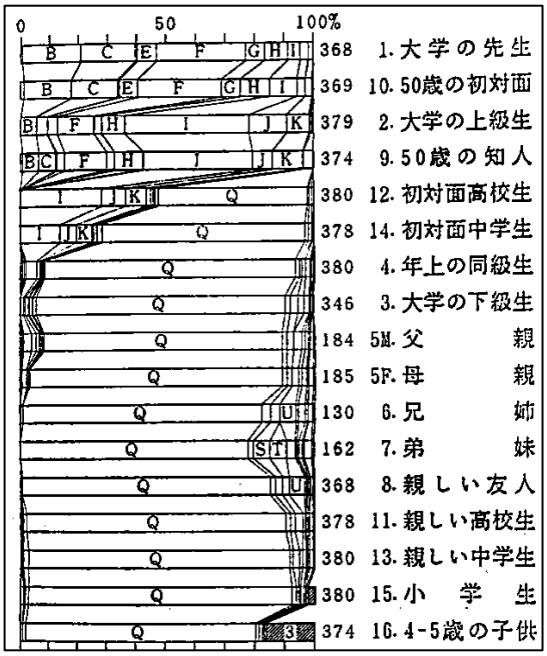

図１　日本「行くか」1987 年（荻野他 1990:11）

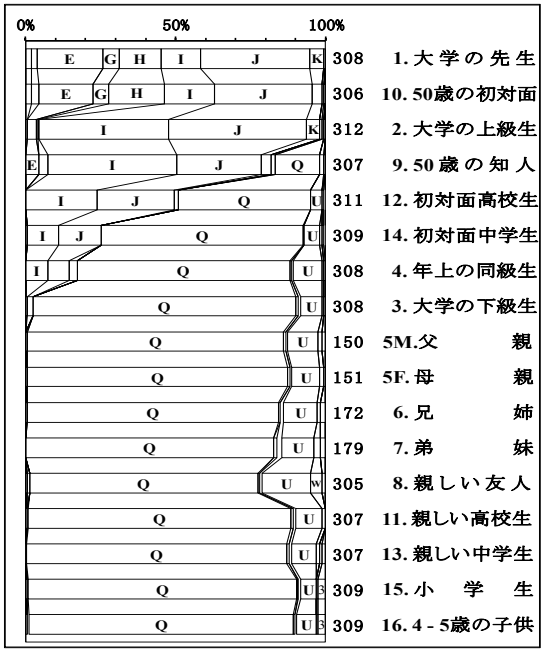

図２　日本「行くか」2018 年

凡例（図1・図2共通）

A=おいでになりますか	I=いくんですか	Q=いくの?	Y=いくのや
B=いらっしゃるのですか	J=いきますか	R=いくのか	Z=いくんか
C=いらっしゃいますか	K=いくのですか	S=いくんだ<あ>	1=いくん？
D=いらっしゃるか	L=いくんです？	T=いくんだよ	2=いがんげ・いがんだ
E=いかれますか	M=いらっしゃるの？	U=いく？	3=いくのかな<あ>
F=いらっしゃるんですか	N=いかれるの？	V=いくと？	
G=いかれるのですか	O=いきます？	W=いくん？	
H=いかれるんですか	P=いくんだい	X=いかん？	

日本語における 30 年間の敬語表現使用を比較分析した結果は、以下のようにまとめられる。

(1) 2018 年の結果では、敬語表現の多様性は若干減少しているが、丁寧にいうべき相手とそうでない相手がきれいに区別されている。また聞き手の並び順も 1987 年のものと同一である。

(2) 敬語表現に注目すると、2018 年の結果では、イラッシャル系（B、C、F）が減少し、イカレル系（E、H）および尊敬要素なしの丁寧形のみ（I、J）が増加している。

(3) そして 2018 年の結果では、ノダ形式なしの表現（E、J、U）が好まれる一方で、S「行くんだ＜あ＞」、T「行くんだよ」など、断定辞や終助詞のついた形は減少している[6)]。

6) 2018 年の調査において女性の被調査者が多くなったことが結果に何かしらの影響を及ぼした可能性も捨てきれない。しかし、J「行きますか」やU「行く？」は、1987 年の調査において女性よりも男性が多く使用していた形式であり、E「行かれますか」については男女差はほとんどなかった。この傾向は 2018 年の調査でも同様である。したがって、2018 年の調査において、女性の被調査者が多くなったことがノダ形式なしの表現の増加に影響

以下、上の結果について解釈を施す。

まず、近年若年層話者の場合、「行く」の意味で尊敬動詞「イラッシャル系」の代わりに「イカレル系」が多用されることが指摘されている（洪珉杓 2009、田邊・金・倉持 2016[7]など）。本研究は、これらの結果を追認することになったが、これを以て直ちに尊敬動詞使用の衰退とレル敬語へのシフトと解釈するには注意を要する。なぜならば、水谷（2005）によって、「イラッシャル」の使用が、「来る」や「いる」の敬語に特化されつつあり、「行く」の敬語形としては、徐々に使われなくなってきていることが論証されたためである。「イラッシャル」は敬意によって動作主の移動の方向を中和するよりも、話し手が自身の関わる移動を優先して表すようになり、「いく」の意味領域に縮小が生じているという（水谷 2005:41）。

次に、約 30 年前と比べて非ノダ疑問文が増えたことについては、日本人の聞き手敬語の運用のどのような側面を反映したのか、またノダ形式が丁寧度に及ぼす影響について今のところは明確な答えを持ち合わせていない。ただ、ノダ疑問文は、相手が既にどこかへ行くことを決めていることを前提にした上で（既定性）、行き先を尋ねている文である（田野村 1990）。したがって、ノダ疑問文は、問いかけ性の強い表現形式であり、話し手の興味・関心を示す効果がある一方で、状況によっては聞き手の行動を詮索したりするような意図を明示的に伝達することになる。そのため、聞き手が行動や予定を詮索されていると感じ、不快に思う恐れがある（楠本 2016）。もしそうだとすれば、聞き手領域に立ち入ることで引き起こされる摩擦を回避するため（この理由で断定辞や終助詞付加文も回避される）、いささか関係性の希薄な問いかけになるが、非ノダ疑問文を選択することになる。こうした傾向は、特に「大学の先生や上級生、50 歳の人」など、丁寧に待遇する聞き手に対して強くなる、という積極的な解釈が可能になるのではないかと思う。

以上で、日本語における 30 年間の比較結果では、表現形式の選択においてイラッシャル系よりイカレル系が優勢であること、尊敬要素なしの丁寧語が勢力を増していること、また非ノダ疑問文が増えていること、といった 3 点の違いが見られたが、聞き手の位置付けが同一であるなど、大まかには近似した結果が得られたと思われる。こうした結果が得られたことは、日本社会が 1987 年から 2018 年までの約 30 年の間、本質的なところではさほど大きく変わっていないことを物語るのであろう。1987 年当時の日本社会は、戦前・戦後の混沌を乗り越え、新しい社会体制がすでに出来上がり、安定していたと言えよう。

5.2. 韓国語における 30 年間の比較

では、韓国語における 1987 年と 2017 年調果の 30 年間の比較結果はどうだろうか。韓国語における聞き手と敬語表現の関係についてまとめたものを、図 3 と図 4 に示す[8]。

しているという可能性は少ないと思われる。

7） 田邊・金・倉持（2016）は、「（ら）れる」敬語形の優勢とともに、敬意が落ちる丁寧語のみの形（イキマスカ）を使用し、尊敬語を使用しない傾向にあることも指摘している。本研究の結果と軌を一にするものであるが、ここでは詳しく論じるだけの紙幅の余裕がないので別の機会にゆずることにする。

8） 1987 年調査時の B「가시요(kasiyo)?」と C「가시지요(kasijiyo)?」は、2017 年の調査では出現していない。一方、「가시나요(kasinayo)?」、「가나요(kanayo)?」、「가노(kano)?」、「감(ka

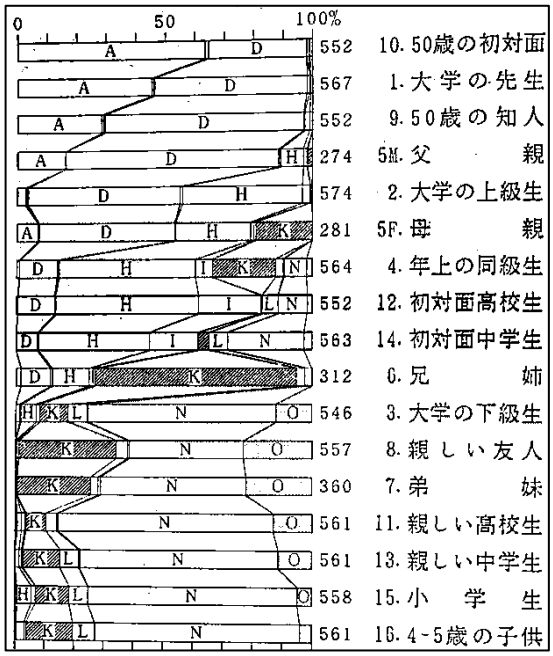

図 3　韓国「行くか」1987 年（荻野他 1990:12）

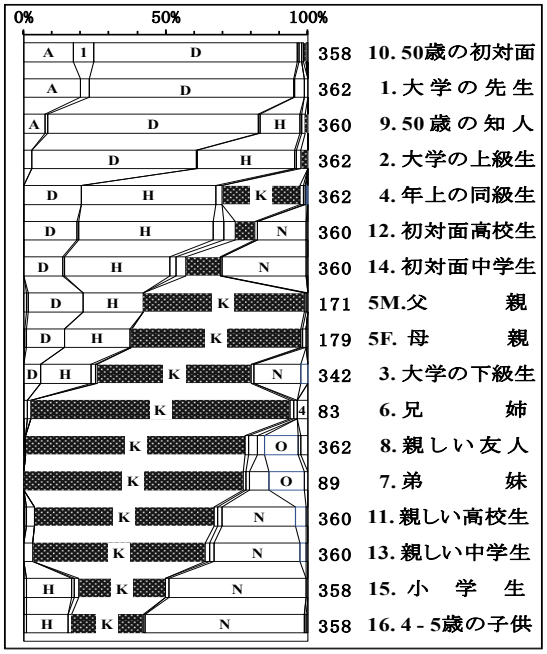

図 4　韓国「行くか」2017 年

凡例（図3・図4共通）			
A＝가십니까?	E＝가실거예요?	2 ＝가나요?	N＝가니?
B＝가시요?	F＝가실건데요?	J ＝가는데?	O＝가냐?
C＝가시지요?	G＝갑니까?	K＝가?	3 ＝가노?
1 ＝가시나요?	H＝가요?	L＝가지?	4 ＝감?
D＝가세요?	I ＝가죠?	M＝가나?	

韓国語における 30 年間の比較図からは、以下のことが言える。

（1）上向きの表現では、2017 年の結果では、上称（A）の減少と略待丁寧形＋尊敬接辞「시(si)」（D）の増加が著しい。尊敬接辞「시(si)」の力は依然として強い（A、D）。

（2）下向きの表現では、2017 年の結果では、下称（N、O）の減少と略待普通形（K）の増加が著しい。O「가냐(kanya)？」は「親しい友人」と「弟妹」などにかろうじて

m)?」などの語形が 2017 年の調査において新たに登場した。図 4 では 2017 年の調査時に新たに登場したこれらの語形に 1-4 の番号をつけておいた。なお、2017 年の調査時に新たに出現した 1「가시나요(kasinayo)?」と 2「가나요(kanayo)?」は、M「가나(kana)?」に丁寧の補助詞「요(yo)」と尊敬接辞「시(si)」の両方か、または丁寧の補助詞「요(yo)」のみが付加された形である。1987 年の調査では M「가나(kana)?」のみが出現していたが、2017 年の調査では、1「가시나요(kasinayo)?」、2「가나요(kanayo)?」、M「가나(kana)?」の 3 つの形式が待遇レベルを異にして出そろうようになった。先述したように、荻野他（1990:25）では、この M「가나(kana)?」を、④等称を転用して疑問形だけに現れるもので、迂言的疑問用法としてやや特殊なものと判断したが、M「가나(kana)?」が一般的な疑問表現として使用され始めた様子を捉えたものと思われる。後に M「가나(kana)?」は、⑤略待普通形（hay 体）の一形態として認められるようになる（한길【韓桔】1991）。

残っている[9)]。

（3）その他、上位部（50 歳の知人）と下位部（小学生、4-5 歳の子供）への略待丁寧形 H「가요(kayo)？」の浸透が認められる。

（4）また、聞き手に注目すると、「父母」に対する丁寧度が大きく変わっている。1987 年の結果では父母に対して尊敬接辞「시(si)」を用いていて（A、D）、特に父親は「大学の上級生」よりも高く待遇していた。しかし、30 年後の 2017 年の結果では略待普通形（K）が多くなり「初対面の中高生」よりも丁寧度の順番が下がっている。

以上の韓国語における 30 年間の比較結果からは、次の 2 点が指摘されよう。

まず、上称（A）と下称（N、O）が減少し、略待丁寧形（D、H）と略待普通形（K）が大幅に増加したのは、2017 年の韓国語において、上下関係の固定化を嫌い、関係非表示を行なっているためと思われる。そのメカニズムについては、§6.で詳述する。

荻野他（1990:26）では、略待というのは本来の待遇語尾を略したものであり、略待普通形（K「가(ka)？」）について、いわゆる語尾のないかたちとして、いろいろな人に対して使われるという点で「待遇意識」が薄い表現であると指摘されている。略待普通形（K「가(ka)？」）の場面ごとの増減パターンが単純ではなかったが、1987 年の調査においていみじくも略待普通形（K「가(ka)？」）が家族内や親しい人を相手にして使用され、拡大されつつある瞬間を見事に捉えたものと言えよう。

次に、略待丁寧形の H「가요(kayo)？」は、述語部分を曖昧にして（略待にし）、丁寧を表す補助詞「요(yo)」をつけたものである。1987 年の調査当時は、「年上の同級生」や「初対面の中高生」など、相手を高く待遇する尊敬接辞の「시(si)」を使うには憚られ、さりとて同等か下に待遇することもできないような相手に対して使用され、すでに定着していたと思われる。その後、略待丁寧形の H「가요(kayo)？」は使用領域を拡大し、2017 年の結果では、上位部の 50 歳くらいの知人にも使用されている。また、下位部の小学生や 4-5 歳の子供にも使用されるようになった。略待丁寧形の H「가요(kayo)？」が「社会的尊重の標識」としての機能を持ち合わせつつあると思われる[10)]。

5.3. 聞き手に対する待遇構造の違い

ここでは、どういう人物を丁寧に待遇するか、聞き手の位置付けを行い、図 5 に示す[11)]。なお、図では荻野他（1990）に倣い、日本と韓国の丁寧度の計算の結果から、日韓で聞き手

9） ここで韓国語における男女差について若干触れる。1987 年の調査結果では、女子大学生は N「가니(kani)？」を使うのが一般的だったが、男子大学生は N「가니(kani)？」も O「가냐(kanya)？」も使っていた。O「가냐(kanya)？」は男性によって多く使われている表現であり、特に男性の親友に対して最も多く使われ、身近な目下の人に使われる表現であった。しかし、2017 年の調査では、男性も女性も O「가냐(kanya)？」を「親しい友人」と「弟妹」にほぼ限定して使っている。

10） 本研究での設問はカジュアルな場面設定であり、公の場面やかしこまった場面では略待丁寧形がさらに広い勢力を持つことが予想される。そのような場面では、略待丁寧形が対人距離の調整や公私の区別など、戦略的な用法として用いられやすくなると考えられる。

11） 日本の 2018 年調査と韓国の 2017 年調査における丁寧度の数量化は、荻野他(1990:18)を参考にし、6 サイクルで完成された。

の位置付けとして差がないものをいくつか除外して示している[12)]。

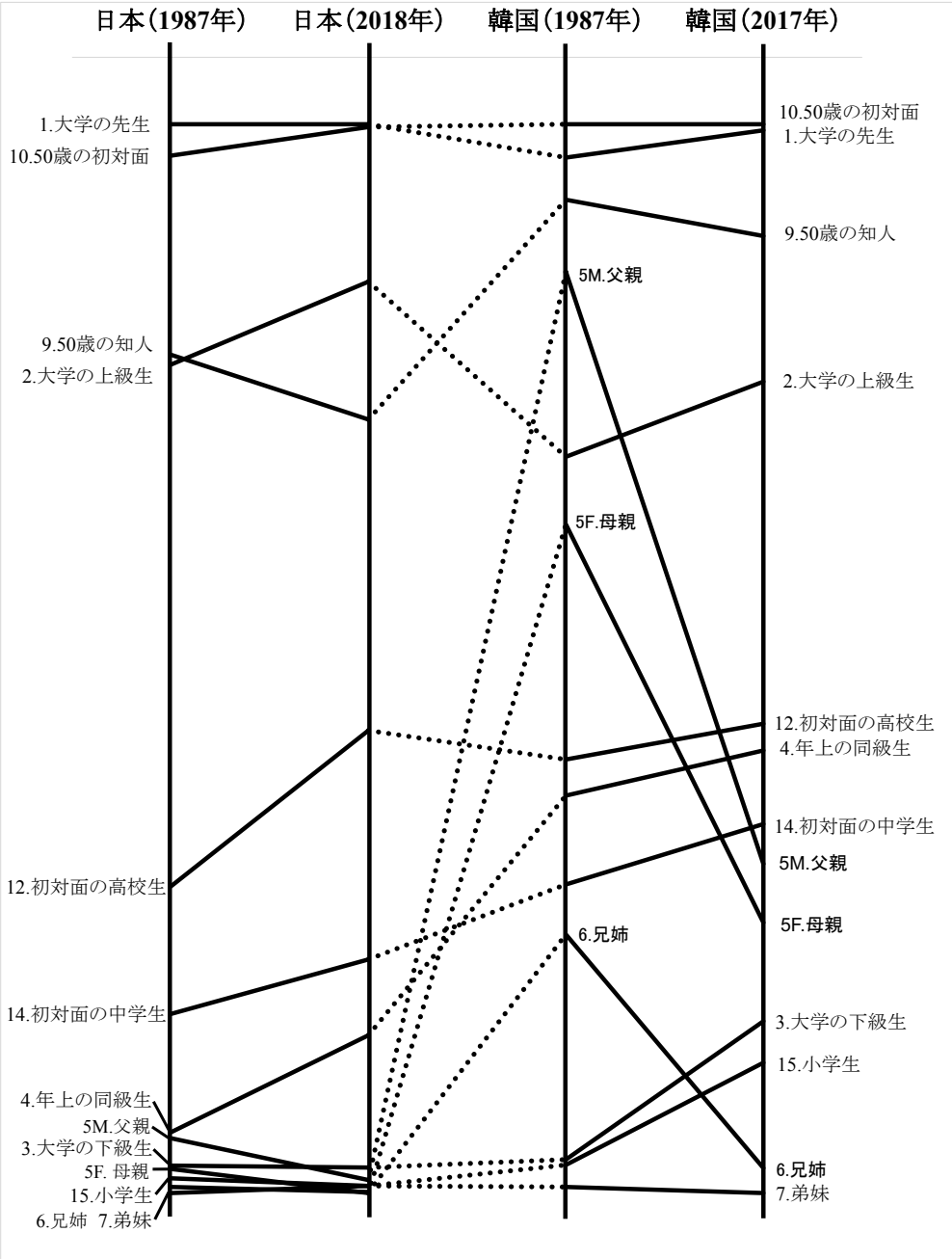

図 5　日本と韓国の聞き手に対する丁寧度の違い

図 5 を見ると、まず日本では、1987 年と 2018 年の約 30 年間で、聞き手の位置づけにおいて大きな変動といわれるほどの違いはない。特に家族の構成員に対して、ほとんど差がない。

12）図から除外した聞き手は、「8.親しい友人、11.親しい高校生、13.親しい中学生、16.4-5 歳の子供」である。

次に、韓国では、1987 年と 2017 年の約 30 年間で、家族内においての上下関係が著しく弱化している。「父親」「母親」は兄姉や弟妹ほどではないが、30 年前と比べれば下位に位置するようになった。また「兄姉」と「弟妹」の差はほとんどなくなった。一方、いくつか上昇が目立つものもある。下位部に位置する「大学の下級生」や「小学生」などである。

図 5 からは、日本では敬語の使い分けの基準として家族に対してウチと見なす第一のルールが働き（ウチ・ソト関係）、家族以外では「聞き手との社会的役割」が大きく働くことがわかる。一方韓国では、親族以外では「聞き手との年齢差」が大きく働く、という聞き手敬語の基本構造は変わっていないことがわかる。ただし、韓国社会では、伝統的な家父長制の家族構造が崩れつつあり、個人の権利を尊重し、たとえ相手が目下の人でも丁寧に待遇すべきである、といった「社会的尊重意識」が見られ、それが言語生活にも反映されるようになったことが見て取れる。韓国の家族や大学を取り巻く社会が急激な変化を遂げていることがうかがえる。

6. 韓国語の敬語用法変化の背景

本節では、韓国語の聞き手敬語の変化を促すものとして、略待普通形の使用拡大という言語内的な要因と社会変化意識という言語外的な要因について論じる。

6.1. 略待普通形（hay 体）の本質

まず、30 年間で最も大きな変化を見せている K「가？」（略待普通形、hay 体）の形態面や使用場面の側面に焦点を当てて、勢力の弱化が著しい N「가니？」や O「가냐？」（ともに下称、hayla 体）と比較しつつ述べる。

下称は、前期現代（第 2 次世界大戦以前、徐正洙 1978）の韓国語の待遇法体系において、多くの研究で一様に、最も低い待遇レベルに位置付けられている。一方、略待普通形は現代になって使用されるようになった新しい待遇レベルであるため、その位置づけについてさまざまな議論がなされていた。高永根（1974:87）によれば、李完應、朴勝彬、崔鉉培などの前半期文法家らは、略待普通形（原文ではパンマル）を論外とするか、論じるにしても等外（レベル外）にしたり、あるいはその等分（レベル）が不分明なものと捉えていたという。そして、成耆徹（1970:127-8）によれば、이희승【李熙昇】（1956）でも略待普通形は等外に処理され、「해라도 아니오, 하게도 아니오, 하오도 아니오, 말을 그저 어물어물하여 끝을 아물리지 않는 말」（ヘラ体でもなく、ハゲ体でもなく、ハオ体でもなく、ただはっきりせず、言い切らないことば）と捉えられていた。

이희승【李熙昇】（1956）のいうところの「はっきりせず、言い切らないことば」とは、略待普通形（hay 体）が終結語尾を持たず、連結語尾で発話を終了していることを指すものである[13)]。その後、現代後期になって、略待普通形（hay 体）が広く使われるようになって、

13）ここで韓国語の動詞の活用形についてごく簡単に触れておく。まず、韓国語の動詞は語幹と語尾に分節される。なお、ここでは便宜的に Yale 方式のローマ字表記に限って形態素ごとに「-」で区切ることにする。
・耐える「참다(cham-ta)」：語幹「참(cham)」＋語尾「다(ta)」

一つの待遇レベル見なされるようになった。つまり、成耆徹（1985:104-5）、서정목【徐禎穆】（1987:108-21）などが指摘する通り、連結語尾「-아(a)／어(e)」が終結語尾化したものである[14]。こうして、連結語尾の「-아(a)／어(e)」が終結語尾化したとは言え、元々連結語尾だったことを考えれば、略待普通形（hay 体）の本質は、連結語尾の「-아(a)／어(e)」で終わる言いさし形、中途終了形と捉えることができる[15]。

このように、略待普通形（hay 体）の K「가(ka)？」は、終結語尾を省略したものであるが、H「가요(kayo)？」から N「가니(kani)？」、または O「가냐(kanya)？」までの幅広い待遇レベルの終結語尾が省略されたものと認識されており、いわゆる「形態的代替性」を帯びている[16]。さらに、韓国語において、終結語尾は話し手の待遇意図を表示する機能があるので、終結語尾を明示すると、話し手の態度を明確に表示することになる。一方、連結語尾で終わる発話は、態度が曖昧化されるのである。これによって、徐正洙（1978:16）のいうように、待遇レベルをぼかす効果をもたらし、表現が型にはまったかたくるしさを帯びないで、感じをやわらげる効果をもたらすことになる。

こうした形態的代替性と態度の曖昧化機能という特徴により、略待普通形（hay 体）は使用場面の側面でも柔軟性が持てるようになる。略待普通形（hay 体）は、相手が上位者ではあるが尊敬語や丁寧語（上称や略待丁寧形）を用いると距離感が出過ぎる人たち（父親、母親、兄姉など）に使われやすい。大学の年上の同級生もこの部類に入るだろう。また従来のように相手を下位者として明確に位置付けることに抵抗がある人たち（たとえば大学生の下級生、親しい友人など）を相手にした場合にも好まれる。一方、下称（hayla 体）は、上下関係が明示される待遇レベルであり、敬意を含まない最もぞんざいな言い方なので、現在では上下関係がきちんと定まっているところの上位者が下位者に使えたり、または気心の知れたごく一部の親しい友人にその使用が許されるのである。その場合、下称（hayla 体）は Covert Prestige を持つことになる。

次に、下称（hayla 体）と略待普通形（hay 体）は、平叙形・疑問形・命令形・勧誘形などの活用形が異なるが、たとえば命令形の場合は次のようになる。

・下称「참아라(cham-a-la)」：語幹「참(cham)」＋連結語尾「아(a)」＋終結語尾「라(la)」

・略待普通形「참아(cham-a)」：語幹「참(cham)」＋連結語尾「아(a)」

下称（hayla 体）には命令を表す終結語尾「라(la)」が付属するが、略待普通形（hay 体）には終結語尾がなく、連結語尾の形で終了している。

14）非終結語尾の終結語尾化に関する論議は、김태엽【Kim, Tae-yop】（2001:96-125）を参照されたい。なお、略待普通形（hay 体）は、連結語尾からのものだけでなく、接続文の後節や内容文の上位文が省略されてできた minor sentence から発達したものである。

15）下称（hayla 体）と略待普通形（hay 体）の命令形を日本語に訳すると、それぞれ「耐えろ」と「耐えて」のようになり、略待普通形（hay 体）はテ形で終わる言いさし形または中途終了形であることが確認可能である。このように、略待普通形（hay 体）を言いさし形、中途終了形と捉えるという観点を持つと、李恩美（2011）や高木（2012）などの、日本語と韓国語における「中途終了発話文」の出現頻度調査において、韓国語の談話に中途終了発話文の出現数が少ない、といった調査結果がさらに納得のいくものとなる。

16）高永根（1974:80）はこの略待普通形（hay 体）を「요(yo)統合可能形」と呼んでいる。本研究でも異論はないが、略待普通形（hay 体）が略待丁寧形（hayyo 体）や下称（hayla 体）と言語運用上のバリエーションの関係にある、という点に焦点を当て、「形態的代替性」という用語を用いることにする。

6.2.　社会変化意識

次に、日本と韓国の大学生に対象にした社会変化意識についての調査結果をまとめる。2017 年に実施したアンケート調査では、30 年前（1987-88 年）と比べて、現在の日本社会、また韓国社会はどのような方向へ向かっていると思うかを尋ねた。調査項目は次の 4 つである。

①和やもてなしの精神など、伝統的な価値観をより尊重する社会[17)]

②地域社会の大人をより敬う社会

③相手が目下の人でもより丁寧に待遇する社会

④個人の権利をより尊重する社会

それぞれの項目について、「1.とてもそうだ、2.ややそうだ、3.どちらでもない、4.あまりそうでない、5.全くそうでない」の 5 段階スケールで問うている。そのうちの、「1.とてもそうだ」と「2.ややそうだ」という肯定的な回答をまとめて、結果を示すと、次の図 6 のようになる。

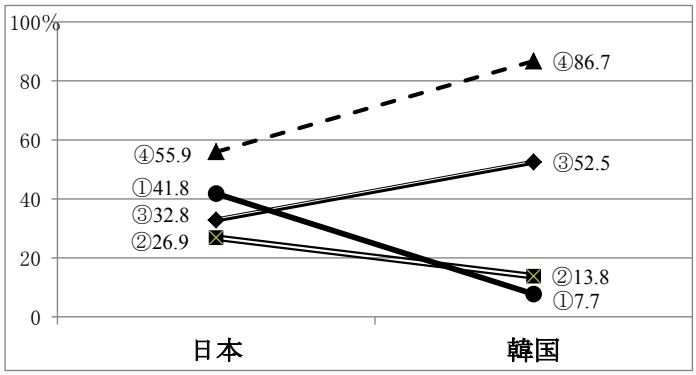

図 6　30 年間の社会の変化についての考え方

日本では、④個人の権利を尊重する社会へと変化しつつあるという答えが多く（55.9%）、次いで①伝統的な価値観を尊重する社会へ向かっているという答えが多かった（41.8%）。しかし、②地域社会の大人を敬う社会ではなくなりつつあり、また③目下の相手でも丁寧に待遇する社会であると意識する人は少なかった。

一方、韓国では、④個人の権利を尊重する社会になっているという回答が多く（86.7%）、さらに③目下の相手でも丁寧に待遇する社会へと変化しつつあるという回答が多かった（52.5%）。反面、②地域社会の大人を敬う社会ではなくなりつつあり、①伝統的な価値観を尊重する社会へ向かっているという答えは最も少なく、わずかに 7.7%に過ぎない。

図 6 の結果を見る限りにおいて、韓国の大学生は、韓国社会が伝統的な価値観を尊重する社会ではなく、個人の権利を尊重する社会へ向かっていると意識することがわかった。つま

17）韓国の調査では、次のように問うている。「유교 정신 등 전통적인 가치관을 좀더 존중하는 사회（儒教の精神など、伝統的な価値観をより尊重する社会）」

り、1987 年当時は、主に儒教的な価値観の長幼の序といった年齢の上下差がほぼ唯一の基準であった権威的な社会構造だったが、30 年後の 2017 年には個人の権利を尊重する民主社会になり、下位者に対する社会的尊重意識も生まれてきた。そこで略待普通形（hay 体）の K「가(ka)？」が、「形態的代替性」を持った言いさし形という基本的な性質によって選好され、相手を上とも下とも位置付けないといった「態度の曖昧化」の発話効果が図られたと考えられる。社会はすでに変化しており、言語使用が後を追っている形勢であろう。

7.　おわりに

今からおよそ 30 年前の、1987 年当時の韓国は元軍人が統治する国であった。権威的な上下関係が重視され、伝統的な儒教の価値観が社会を支配していた。一方、30 年後の 2017 年の韓国の社会情勢については、政治的には民主化が進行し、社会文化的には、個人主義的価値観が浸透し、対人コミュニケーションにおいても水平的関係が求められるようになった。

1987 年当時の韓国と約 30 年後の韓国の聞き手敬語の変化を調べるため、荻野他（1990）の 1987 年の調査と同じものを 2017 年に実施した。韓国語における 30 年間の敬語用法を比較すると、韓国社会では依然として年齢差を重視し、年齢で丁寧度が決まる度合いが高いことは変わらない。しかし、(1) 下向きの敬語表現では、下称（hayla 体）の減少と略待普通形（hay 体）の増加が著しいことがわかった。そして、(2) 1987 年の調査では父母に対して尊敬語や丁寧語を使う人が多かったが、30 年後の 2017 年の調査では、略待普通形を使う人が多くなった。さらに（3）大学の下級生や小学生にも丁寧語を使用する人が増えてきた。

2017 年現在の韓国における聞き手敬語の使用様相は、社会的には年齢の「上下関係」が重視される中、家父長制の家族構造は崩れつつある。その一方で個人の権利を尊重し、たとえ相手が目下の人でも丁寧に待遇すべきである、といった社会的尊重意識が見られ、それが言語生活にも反映されるようになったとまとめられる。そして韓国における聞き手敬語は、格式ばった上称と下称の使用減少や、言いさしスタイルの略待丁寧形と略待普通形の使用拡大というの変化の中にあり、その変化は家族内から始まったと考えられる。荻野他（1990）の 1987 年の調査は、言いさしスタイルの略待普通形が家族内や親しい人を相手にして使用され、拡大されつつある瞬間を見事に捉えたものである。

【謝辞】

大学院生時代に本研究のモデルとなった荻野他（1990）を拝読し、その内容の深さと論理の緻密さに感銘を受けた。研究の再生産ができるように有益な研究を行ってくださった諸先輩に改めて敬意を表する。

【参考文献】

李恩美（2011）「会話に見られる日韓の『中途終了型発話』の使用様相－日本語教育への示唆も含めて－」『日本言語文化』18，pp.217-236　韓国日本言語文化学会.

梅田博之（1974）「朝鮮語の敬語」『敬語講座 8　世界の敬語』pp.249-270，明治書院.

荻野綱男（1989）「対照社会言語学と日本語教育-日韓の敬語用法の対照研究を例にして－」『日

本語教育』69，pp.47-63，日本語教育学会.

荻野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松（1990）「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」『朝鮮学報』136 輯，pp.1-51，朝鮮学会.

楠本徹也（2016）「初対面会話におけるノダ文の表れ」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』42，pp.1-12.

徐正洙（1978）「韓国現代敬語法の推移－最近の設問調査をもとにして－」『朝鮮学報』89 輯，pp.1-26，朝鮮学会.

高木丈也（2012）「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる『中途終了発話文』の出現とその機能」『社会言語科学』第 15 巻第 1 号，pp.89-101.

田邊和子・金順任・倉持益子（2016）「若者における尊敬語の使用傾向と日本語教科書の記述について－「行く」・「来る」・「いる」の対者敬語と第三者敬語－」『明海日本語』第 21 号，pp.35-47，明海大学日本語学会.

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I　「のだ」の意味と用法』和泉選書.

洪珉杓（2009）「韓国人学習者の日本語尊敬表現の使用実態」『日本語学研究』25，pp.309-325，韓国日本語学会.

水谷美保（2005）「『イラッシャル』に生じている意味領域の縮小」『日本語の研究』第 1 巻 4 号，pp.32-46，日本語学会.

高永根（1974）「現代國語의 尊卑法에 대한 研究」『어학연구』10-2，pp.66-91，서울대학교 언어교육연구센터.（高永根「現代國語の尊卑法についての研究」『語学研究』10-2，pp.66-91，ソウル大学校言語教育研究センター.）

김태엽（2001）『국어 종결어미의 문법』국학자료원.（Kim, Tae-yop『国語の終結語尾の文法』国学資料院.）

나동숙（2016）「현대 한국어의 하오체와 하게체 사용 양상 고찰과 교재 분석 -한국어 학습자의 문화적 문식성 향상을 위하여-」『언어와 정보사회』27 권，pp.61-86，서강대학교 언어정보연구소.（Na, Dong-sook「現代韓国語のハオ体とハゲ体の使用様相の考察と教材分析－韓国語学習者の文化的リテラシーの向上のために－」『言語と情報社会』27，pp.61-86，西江大学校言語情報研究所.）

서정목（1987）『국어 의문문 연구』탑출판사.（徐禎穆『国語疑問文の研究』塔出版社.）

成耆徹（1970）「尊卑法의 한 考察」『語文学』通巻第 23 号，pp.125-134.（成耆徹「尊卑法についての一考察」『語文学』通巻第 23 号，pp.125-134.）

성기철（1985）『현대 국어 대우법 연구』개문사.（成耆徹『現代国語の待遇法の研究』開文社.）

왕한석（1986）「국어 청자 존대어 체계의 기술을 위한 방법론적 검토」『어학연구』22-3，pp.351-373，서울대학교 언어교육연구센터.（Wang, Hahn-sok「国語の聴者尊待語体系の記述のための方法論的検討」『語学研究』22-3，pp.351-373，ソウル大学校言語教育研究センター.）

이은희（2010）「한국어 높임법 교육 내용 연구」『문법 교육』13，pp.281-315，한국문법교육학회.（Lee, Eun-hee「韓国語の敬語法の教育内容について」『文法教育』13，pp.281-315，韓国文法教育学会.）

이희승（1956）『고등문법』박문출판사.（李熙昇『高等文法』博文出版社.）

한길（1991）『국어 종결어미 연구』강원대학교 출판부.（韓桔『国語の終結語尾の研究』江原大学校出版部.）

い　きりょん（韓国　中央大学校アジア文化学部教授・大阪大学大学院修了生）